

清流

題字：芳野 充

平成29年10月30日
第10号

発行所 加来不動産㈱
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

心を相手におけて話を聴く

以前、知り合いのおばあちゃんとの会話で、病氣の話になったのですが、その内容が印象深くのこっています。

「わたしはあの医者には好かん。だけんさいきん病院（医者）をかえたい。かえたとこの医者はよかよお。」

どうやら今までかかりつけだったお医者さんは、診察後、おばあちゃんのように顔をむけずパソコンを操作しながら聞いたり、カルテを書きながら応対していたらしく、自分の容態をきちんと聞いてくれない、と感じていたらしいのです。一方で、かえたさきのお医者さんは、おばあちゃんのほうをしっかりと向き、相づちをうちながら笑顔が絶えないから、そのお医者さんに話を聞いてもらえるだけで、気分があかるくなり体調がよくなった、ということでした。

この話を聞き、痛切に感じたことは、人の話をきく姿勢ひとつで、相手の印象がよくも悪くもおおきくかわるのだということ。同時にこわいと感じたことは、話にでた前者のお医者さんは、おそらく気づかないうちに患者さんが減ってくる現実があるのだろう、ということでした。

話を聴かせていただいているなかで、わたしの聴き方が変わったことは言うまでもありません。帰り際、そのおばあちゃんに「とても勉強になる話しをありがとうございます」と伝えたところ、「気持ち一つだよ」と短い言葉をいただきました。

日常の心がけ（思いやりの具体的行動）のなかに「人の話は聞いてねいに聴く」とあります。これは人の話を聴く姿勢ひとつで、相手を不安にさせたり不快にさせることがある。ですが心を相手におけて、ていねいに聴くと、安心やよろこびにつながる行動だと実感しました。

また「聴く」という文字は、その成りたちをみると「耳」に「十四」と「心」の字からなっています。「聴く」は、耳だけではなく、相手に心もむけて話を受けとめる、という意味がこめられているのではないのでしょうか。

さて、家庭において妻や子どもたちにきちんとして心に向けて話を聴けているか、と胸に手を当てて自分に問うてみると、思わず眉間にしわをよせてしまいます。家庭のなかでこそ、大切なことだと感じました。

加来 寛

